大分豊府新聞

第156号

編集・発行所
大分県立
大分豊府高等学校
新聞部
印刷所
大分県立
大分豊府高等学校

おおいた大茶会

人 芸術 想い に出会おう

２０年ぶりの文化の祭典いよいよ開幕

十月六日（土）から十一月二十五日（日）にかけておおいた大茶会が開催される。伝統文化から現代アートまで、県内各地で様々な芸術文化に触れることができる。新聞部は、大茶会に参加する、絵手紙作家の原野彰子さんや、ボランティアとして運営に携わる本校生徒に話を聞いた。

原野彰子さん絵手紙アート 苦難越えて夢掴む

大茶会では大分県各地で絵手紙を出展する絵手紙作家の原野彰子さん。原野さんは生まれた時から下半身不随という障がいを持っている。そのため普通の小学校に行けず、苦しい生活を過ごしてきた。そんな時出会ったのが絵手紙だった。はじめは絵を描くのが苦手で上手く描けなかった。しかし絵手紙の創始者、小池邦夫先生の「下手で良い、下手が良い」というキャッチフレーズを描き続けた。何枚も描き絵が好きになった時に一つの夢が出来た。それは展覧会を開きたいというものだった。毎日描き続けることが大切。足跡を残すように描けば展覧会は開ける」という小池先生からの助言をもらい絵手紙を一年描き続けた。そして夢は実現し、展覧会を開いた。現在は大分の小学校などで絵手紙を教える活動をしている。原野さんは苦しい生活を乗り越えてきた。しかし取材の時には明るく話をし、夢の実現のために常に前向きだった。「どんなに大きな夢でも毎日積み重ねることで実現する」と原野さんは述べる。

（文責・阿南）

明るい笑みを浮かべる原野さん

原野さんの作品

「積極的に参加したい」 ボランティア参加生徒の決意

今回の大茶会では豊府高校から二十名の生徒がボランティアとして参加する。映画館のボランティアに参加する予定の内藤ももこさん（高一・四）は「ボランティアに向けての研修があり、視覚障がいを持つ人の体験をアイマスクを用いて行った。見えないことの怖さを実感し、障がい者の人たちにしっかりと声をかけていきたいと思った」と語った。押し花のボランティアに参加する予定の小坂侑生さん（高一・四）は「車いすに乗る体験をした。意外に乗るのは怖かった。押す側も重くて段差も上がることが出来なかった。押すのも乗るのも普通に生活をおくるより負担が大きくて大変だと感じた。当日は自分から声をかけて障害を持つ人をサポートしていきたい」と述べた。

（文責・和田）

誰もが楽しめる「大茶会」に

全国各地で様々な文化活動に取り組んでいる人達が集まる国民文化祭が二十年ぶりに大分県で開催される。芸術・文化活動への参加を通じて、障がい者の社会参加を促進し、障がいへの理解・認識を深める全国障がい者芸術・文化祭は県内で初めての開催となる。

テーマは「おおいた大茶会」。老若男女、障がいの有無に関わらず、だれもが楽しめる大会を目指すという思いが込められている。

実際に大会に関するパンフレットには、目が見えない人の為に切れ込みをつくり、バーコードがどこにあるのかわかるように工夫が施されている。おおいた大茶会はその込められた思いの通り、障がいのある人もない人も不自由なく参加することが出来る大会となっている。

（文責・鱸）

工夫盛りだくさんのパンフレット

豊交短論

私は今まで現代アートなんて全く興味がなかった。その作品が何を表現しているのか、解釈の仕方が全く分からなかったからだ。絵画や銅像などだけでなく、建物やトリックアート、ボディペイントまでもが現代アートだという。何を以て現代アートとするのだろうか▼今回の別府での取材の主なテーマはアート。何もわからない自分が取材できるのか、不安でいっぱいだった。それまで私は、アートは興味がある人だけが見ればいいと思っていた。見ても何もわからないのに見る必要はない。そう考えていたのだ▼しかし、実際に作者や作品にかかわる人の話を聞き、作品に対する見方が変わった。作者は自分の思いや考え、見る人に伝えたいことを作品に込めているのだ。作品は作者の、そして作品を見る人の内面を映す鏡のように思える▼今でもアートはよく分からない。だが、今回作品を制作する場所や過程を見て、作品一つひとつから色々な思いを知ることが出来ると分かった。おおいた大茶会は、芸術・文化に触れる大きな機会だ。せっかくの機会を利用して、もっといろいろな作品と出会い、多くの人の思いに触れてみたいと思う。

（文責・川本）

別府公園が非日常の世界に

「アニッシュ・カプーア　ＩＮ　別府」はじまる

おおいた大茶会の一環として、別府公園で十月六日（土）からはじまる展覧会「アニッシュ・カプーア　ＩＮ　別府」では、世界初公開のものも含め二点の作品が展示され、アニッシュ・カプーア氏の彫刻などが展示されるギャラリーを見ることができる。カプーア氏は、ロンドン五輪のモニュメント制作、ヴェルサイユ宮殿での個展などの経歴を持つ、現代アートの巨匠である。

別府公園に展示される一つ目の作品は、カプーア氏の代表作である「スカイミラー」だ。直径六メートルのステンレス製の鏡で、どんな天気の日でも空を映し続けることで異空間の入り口のように感じさせる。二つ目の作品は、高さ六メートルの世界初公開の作品で、カプーア氏が特許を持つ「世界で一番黒い塗料」が使われている。この塗料は光の九十九・九パーセントを吸収してしまうので、人は奥行きの感覚を失くしてしまう。

これらの作品が展示されるのは期間中の五十一日間だけで、会期が終わると撤去されるという。

カプーア氏の作品は、建築と彫刻の融合という特徴を持っている。作品も大規模だ。イギリスからのスカイミラー運搬も、当初の陸路で福岡港から運ぶ予定が、作品がトンネルを通らず、海路に変更された。また今回、カプーア氏はまだ別府を訪れておらず、設計チームがカプーア氏のイメージを形にしているという。月田尚子さんは「本人の想像とは違っているかもしれないが、その差もひとつの作品ではないか」と話した。

（文責・佐伯）

カプーア氏のパンフレットを掲げる新聞部員

芸術で別府を豊かに

BEPPU PROJECT

BEPPU PROJECTは別府市を活動拠点とするアートNPOだ。二〇〇五年四月に発足し、今年で十三年目を迎える。代表者の山出淳也さんは大分出身のアーティストで、海外を拠点に活動していた。別府の地に戻ってきた際に、かつてのにぎやかさが薄れた街並みを見て、衝撃を受けた。そこで、他のアーティストが、別府で活動したらどんな作品を作るのか興味を抱き、別府でアートNPOの設立を決めた。

本団体は、現代芸術の紹介や普及、芸術祭の開催や企画などを行っている。広報班総括の月田尚子さんは「アーティストの企画実現に努め、別府の街にアートを残していくのが仕事。要望に応えるのは難しいが、やりがいも大きい」と語る。

広報の月田尚子さん

三年前から毎年、世界中の有名アーティストに代表作の制作を依頼し、別府で展示する芸術祭を行っている。今年は十月六日（金）から一一月二五日（日）まで、大分大茶会と連携し「アニッシュカプーア　IN　別府」、並行して「別府アートマンス」という市民参加型の芸術祭が開催される。百個以上のプログラムが企画されており、芸術の秋を楽しむことができるだろう。

（文責・宗）

表現者達の集う家

清島アパートの魅力に迫る

清島アパートは十年前から、BEPPU PROJECTがアーティストの活動支援の一環として運営しているアパートだ。築七十年ほどの元下宿で、現在全国や海外から十人のアーティストが暮らしている。元々は、別府現代芸術フェスティバル二〇〇九の作品「わくわく混浴アパートメント」の会場として使用された。会期終了後も、気に入ったアーティストが住みことで今に至る。

ダンサーのアイザック・イマニュエルさんと福島麻梨奈さんは、サンフランシスコから別府に訪れ、清島アパートに滞在している。毎週、不老泉温泉で「体ほぐし運動」を地域の人に教え、交流を図っているという。二人は十月より開催の、別府アートマンスで「ものの蒸発」というダンスパフォーマンス、映像作品を披露する。水、湯煙に焦点を当てた作品だ。アートマンス中、清島アパートでは毎日企画が催される。個性豊かなアーティストたちの作品が目白押しだ。

（文責・宗）

「清島アパート」の看板がお出迎え

別府アートミュージアム

新たなポップアートの拠点

二〇十七年十二月に別府市中心部に新たな観光施設を提供する、文化事業の一つとして開館した別府アートミュージアム。個展を開催したいと考えている芸術家や芸術家志望の方々へのサポートとして、施設の提供、多様な企画の開催など、アートに関わる多くの人々の交流の場として活用されることを目的として開館された。絵画や古美術品など約二〇〇点を鑑賞することができ、絵画に至っては、購入することも可能だ。また、芸術に触れやすいように有名画家や芸能人の絵画を主に展示することで若い方や外国人の方、観光客等に楽しめるような施設となっている。館内は、とても落ち着いた空間であり、絵画や古美術品などをじっくり見ることができる。この機に、芸術に少しでも興味のある方は足を運んでみてはどうだろうか。（文責・秦）

偉大さを体で表現